

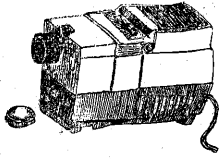
北海道立中央農業試験場(試験場・研究所めぐり93)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者名	盛,時雄
発行元	農業技術協會
巻/号	29巻9号
掲載ページ	p. 420-421
発行年月	1974年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



北海道立中央農業試験場の巻



(試験場・研究所めぐり 93)

中央農業試験場を紹介する場合は北海道の試験研究機関の歴史に遡しなくてはならない。北海道に初めて試験場が設立されたのは明治34年である。現在の札幌の中心地北海道大学隣接地にである。その後各地域に支場、分場、試験地を新設し次第に規模を拡大していった。戦後25年に全国農業試験研究機関の整備統合があったが、その時点では本場のほか6支場、9分場、11試験地を有する大世帯となっていた。同年のコンソリデーションにより札幌の本場は道立農業試験場と農林省農業試験場に分離、支場は全て道立農業試験場に移管され、かつ試験地は6か所を農林省農業試験場に移管し他は廃止された。

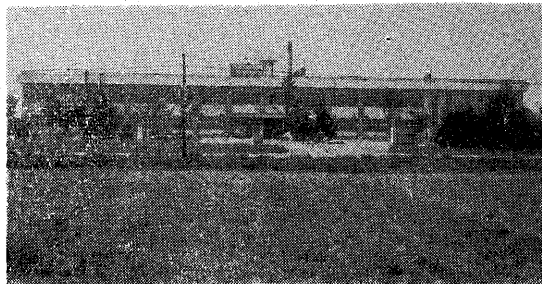
昭和30年代の中頃より本道においても農業の近代化、大規模化が提唱され、これらに対応する試験研究のあり方が議論された。昭和39年に道立農業試験場の大機構改革がおこなわれ本場が中央農業試験場になり支場がそれぞれ独立し2つの畜産試験場を加えて現在の北海道立農業試験場(7農試、2畜試、1原原種農場)の形態ができあがった。

昭和41年中央農業試験場は札幌市の都市化の波に押され、都会の俗塵を離れて山紫水明の長沼町へ移転してきた。当時移転候補地として数か所があげられた。なかでも土壌、用水、気象などの環境条件、生活環境、交通機関、行政対応等を中心にいろいろ検討が加えられた結果、試験研究を進めるためには第一に土壌条件が良好でなければならないとの意見が支配的となって現在地の交通の便の余りよくない長沼町北長沼へ移った。従って試験場へのコースは町内に鉄道駅がないので説明しにくい。札幌を東へ国道12号線を走り途中で道は札夕線に入り約30kmで長沼町市街に着く。さらに北へ8km行くと純農村の風景のなかに一際目立つ2階建の建物が右手に見えるがこれが中央農業試験場である。試験場はこの町を東西に走る標高170mの馬追山丘陵地の東端にあって洪積の緩傾斜地、沖積の平坦地からなっている。5年前にはこの閑静な試験研究環境にある馬追丘陵地の指呼の位置にミサイル基地が設置され、静かな田園も騒然とした空気に変わり反対運動の激化と共に一躍全国に名をはせることになった。

中央農業試験場の機構は場長、副場長のもとに9部2室17科がある。職員は159名のうち研究職員105名、専門技術員8名、事務職員21名、農業技能員15名、その他10名となっている。面積は本場64.3ha、隔地の稲作部31.7ha、江部乙りんご試験地3.7haで合計99.7haである。

特色は総合試験場の形態をとっていることである。先の機構改革時に各農・畜試にはそれぞれ性格付けをして主要分担項目を決めている。当場は道央部の空知、石狩、後志、日高、胆振の5支庁を担当する中央部地域の農業試験場の性格と全道の農・畜試の連絡調整機能をもつセンター的農業試験場の二面の性格をもっている。もともと道内の各農業試験場、畜産試験場は国立も道立も一つ屋根の下に住んでいた仲であって個人的な親近感も相当深いものがある。こんな訳で農林省の地域農試との関係、道立各農・畜試間の連絡協調は他のブロックにはみられないくらい良くいっている。

一般論として159名もの大世帯になれば試験場も多少マンモス化の恐れがある。縦、横の糸が聊



かでも乱れることのないよう場運営には特段の配慮が払われている。毎月2回の定例部長会議のほか、科長会議さらに研修図書、福利厚生、共同施設利用、防災、場運営改善などの各種委員会が必要に応じて開催されている。また一般広報誌「場内だより」を発行して場員の意思の疎通を図っている。

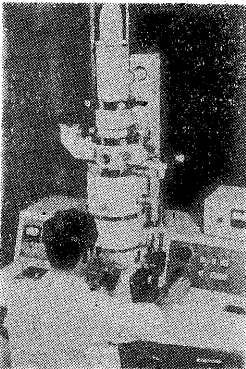
現在の茅野三男場長は昭和39年の機構改革後第3代目通算第15代目に当る。水稻育種の研究歴が長く、育成した優良品種は数多い。現場でたたき上げた経験は若いものの気持をよく理解してくれる。また部下の面倒をみることで場員の信頼感は極めて厚い。学究肌の人で研究マネージメントとしての洞察力、行動力、判断力は抜群で口

* 茅野三男場長(上の写真)と本館。

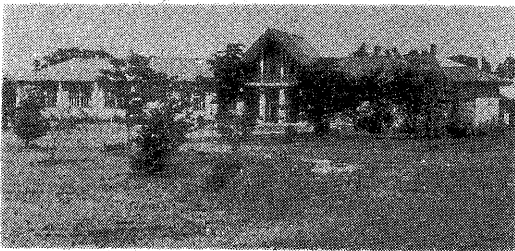
八丁、手八丁の場長である。場の運営には調和と協力をモットーとしている。道立農業試験場長会の会長のほか全国農業試験場長会の北海道ブロック世話人として活躍している。

施設、備品関係で誇れるものは特別ないが総合農業試験場として一通りのものは整っている。なかでも農業機械のための330m²の大型不凍実験室は雪の北海道ならではのものである。冬期間でも機械化圃場試験ができるように工夫されている。作業室群は火災類焼防止上から密集を避け一定間隔で各部の専用作業室が配置されている。これに費す面積も大きいが北海道の試験場だからこそのような利用形態も考えられるのであろう。

次に各部・室の主なる業務概要を紹介する。中央農業



試験場が全道に広がる農・畜試の連絡調整に当たっていることは上述の通りであるが、技術連絡室は試験研究課題の調整、研究推進のための調査、解析、資料作成、情報提供、成果の刊行、図書の出貸整理ならびに試験設計・成績の検討会議の開催など盛り沢山の業務を担当している。稲作部（岩見沢



市上幌向町)は本場から北へ約15km離れた空知平野の水田中心地帯にある。もと空知支場として多くの業績をあげていたが、機構改革に際して中央農業試験場に吸収された。道央以南の稲作の研究を担当し昭和30年の開設以来育成した優良品種は9品種に達する。また省力技術のチャンピオンとして当部が全国にさきがけて開発したペーパーポットのばら播栽培がいま全国的な注目を集めている。畑作部は集約的、園芸作物的栽培が要求される道央圏の純畑作技術の改善に取り組んでいる。指定試験事業による晩生大粒の大豆新品種の育成を初め良質高級菜豆の育成試験を実施している。当部育成の大豆優良品種「ユウヅル」は大粒良質の銘柄種として近年になく好

評であって水田転換畑に作付が多い。また甜菜の直播栽培、除草剤の適正利用など省力化に重点をおいた試験をしている。園芸部は果樹ではりんごの寒地向適品種の育成および選抜を進めている。また本年度から醸造用ブドウの品種選抜に着手、遠くドイツ、オーストリアから品種を取り寄せその適応性を検定している。さらに東北の関係県とりんごわい性台利用の早期結実、品質改善試験を進めている。江部乙りんご試験地では老齢樹園の更新ならびに地力増強試験を実施している。野菜試験は冬期間の野菜の確保を目的に貯蔵向品種の選定試験をすすめるとともに簡易空調式貯蔵庫を利用した野菜の貯蔵実用化試験も併せて実施するなど生産から流通まで一貫した試験が組まれているのが特徴である。このほか露地栽培における省力機械化試験を主要課題として集約的な園芸野菜作を北海道的な大規模畑作型野菜作に転換しようとしている。

畜産部は道央、道南地域を対象に酪農経営、肉牛飼養経営の技術体系に必要な素材技術の開発に努めている。また稲作の生産調整にともなう水稻、牧草の輪換栽培ならびにいなわらサイレージによる肉牛の育成肥育試験を実施している。化学部は全道耕地土壌の基本的性格ならびに生産阻害要因の究明をおこない適切な土壌改良対策を進めている。また園芸作物を対象に肥培、水管理を通じて生産物の品質改善を図っている。さらに本年度からは環境保全科が新設され重金属汚染土壌、大気汚染防止など公害関係の試験を担当している。病虫害部は主要農作物のうち特に被害の多いりんご腐乱病、黒星病、玉ねぎ乾腐病、豆類黄化病、ジャガイモシトセンチュウの防除対策試験を実施している。とくにセンチュウ防除対策のために特別共同研究チームを作り現地真狩村に実験室を建てて研究員が泊り込みで研究に没頭している。その他農薬残留毒対策、発生予察調査なども実施している。

農業機械部は大規模農業の展開に適合した農業機械の改良開発を進めるとともに作業精度、能率、耐久力等に関する性能調査を実施している。また水稻作、園芸作の機械化試験を関係各部と共同研究を組み試験を進め本道機械化農業の先駆的役割を果たしている。

本道農業はわが国の食糧供給基地としての役割を果たし安定した農業経営を維持してゆくためには、労働生産性を高めることが必要である。かかる観点から経営部は農業経営の投資効率、農業機械化銀行方式の役割、稲作転換経営の安定化などの課題の調査研究をおこない本道農業経営の羅針盤的役割を果たしている。

(技術連絡室 盛 時雄)

* 電子顕微鏡(上の写真)と稲作部庁舎。